

王権とその背域

——東南アジア港市論と水利都市論の拡がりをめぐって——

野間晴雄

I. はじめに

- (1) 問題設定
- (2) 背域の性格とその構成要素

II. グロリエのアンコール水利都市論の合意

III. リードの港市論の合意

IV. 港市とその背域

- (1) 港市の類型
- (2) マラッカ
- (3) アチェとパレンバン

V. ビルマにおける王権・囲郭都市とその背域

- (1) タトン、ペゲー、ミョウハン
——沿岸の港市
- (2) パガン
- (3) アマラプラとマンガレー

VI. タイにおける王権とその背域

- (1) ムアン型国家
——チェンマイとスコータイ
- (2) アユタヤ——デルタの港市

VII. ベトナムにおける王都とその背域

VIII. おわりに

I. はじめに

(1) 問題設定

王権とは国王のもつ権力・権威をさし、それは〈みやこ〉王都に強く刻印されている。東南アジアの都市は、華僑や植民都市をあげるまでもなく、その歴史を辿ってみると、何らかの「外力」によって植え付けられた性格がたいへん強い。

大陸部東南アジアに花開いた古典的国家で

は、インドに起源する二大宗教—ヒンドゥー教と大乘仏教—が諸制度や文化に、重層的にきわめて大きな影響を与えている。それは紀元前2世紀頃から始まって13世紀頃に終わりを告げるゆるやかだが直接的な受容である。「サンスクリット化」またはセデスが定式化した「インド化」¹⁾といわれる動きである。その中から、地方分権の勢力とは明らかに異なった巨大勢力が出現する。カンボジアのアンコールやジャワのボルブドゥールの遺跡に代表される巨大な石造建築物と、コスモロジー（宇宙観）の都市プランへの具現を特色とする。ハイネゲルデルンはこの東南アジア王権を、国家を大宇宙、王宮を小宇宙とみたてた、デヴァラジャ（神聖王）による王宮の神聖化としてとらえる²⁾。その祭政一致国家が衰えたあと、島嶼部ではイスラーム教が、大陸部ではスリランカ伝来の南方上座部仏教が国家秩序や人々の生活に大きな影響を与える。

14世紀から16世紀にかけて島嶼部東南アジアを中心に広がったイスラームは、遠距離海上交易の主役となる交易港、すなわち港市を発展させた。政治権力としての王都と港市は同一の場合と空間的に離れている場合がある。いずれにしても、交易港を不可分の構成要素としてもつ集権国家は港市国家 (port polity) といわれる³⁾。グローバルな大航海時代のサブシステムとして、インド洋、ジャワ海、南シナ海を舞台とし、貿易風を利用した無動力船による15世紀から17世紀の「交易の時代」⁴⁾は、東南アジア海域世界が最も精彩を誇った

時代であった。商業的な動機が卓越する海域の港市国家では、宗教が商業的動機に隠れて、王は交易の場を提供するオーナーに徹するため、多様な諸民族が交易する自由都市的性格が当初は強かった。それが植民地化の深化で港市国家の領域支配が進み、交易は宗主国とのつながりを強めるなか、むしろ港市の人口は停滞・減少する場合も出てきて、都市の発展が阻害せられる側面を有していた。

一方、大陸部東南アジアでは、ベトナムを除いて「上座部仏教化」、あるいはその経典を記した文字をとって「パーリー化」現象が顕著になる。この大きな潮流は、従前の「インド化」とは様相を異にし、外来の大伝統を内在化させつつ、現在の東南アジア社会の直接の基盤となっていく。とりわけ、タイ系諸民族の動きが活発化し、周辺のビルマ族やベトナム、クメール、モン族などの先住民族に影響を与えつつ、タイの国家形成が進展した。

本稿の目的は次の3点である。まず、ヨーロッパ諸国が植民地として東南アジアを領域支配する以前の時期を対象にして、各地の王権が自らの王都やその港市をいかなる背景のもとで建設したか、そのプラン・形態や立地の観点から比較考察する。

次に、王権がどの範囲まで、いかなる態様で王都以外の〈まち〉や〈むら〉、〈くに〉と機能的諸関係を取りむすんでいたか、かを、「背域」(hinterland)という概念でとらえる。

上記の問題を考える際に、2つの刺激的な仮説がある。フランスのアンコール碑刻学者で、遺跡の発掘・保存修復に長年携わってきたベルナル・グロリエの水利都市論⁵⁾と、アンソニー・リードの港市論である。内陸の背域を有する王権国家は、その遺跡の美術、建築、考古学的研究は進んでいるが、その生産基盤や社会についての考察は資料の制約もあり大きく遅れていた。グロリエの水利都市論はアンコールを対象にしたその貴重な成果で

ある。この仮説を次節で検討することから、さらに背域についての含意を導き、いくつかの事例をとりあげながらリードの港市論との接点を求めて、比較地域学的考察をすることが3つめの目的である。

以上のような手続きを経て、前近代の東南アジア王権を、その王都や港市のプラン、地理的位置とそれらがとりむすぶ機能的関係を「背域」として統一的に捉え比較することで、共同テーマの「都市・村落論再考」の責を果たしたい。そのため、この小稿は、個別都市の詳細な分析や新しい知見を開陳する方向性の研究ではなく、ある程度判明した事実関係や二次的資料、筆者の現地での知見をもとに、上のような概念を組み込むことで、いかに王都・港市を俯瞰できるか、解釈レベルでの東南アジア歴史都市論序説というべき基礎的な検討である。

(2) 背域の性格とその構成要素

前近代の東南アジア王権の背域として、いかなる要素が想定しうるであろうか。まず指摘できることは、内陸域では、より等質的な生態空間に位置し、複数の生態空間にまたがるような国家はほとんど成立しなかった点である。東南アジアの生態空間⁶⁾としての平原、山地、デルタ、湿地という大枠でみると、前近代の多くの王都は平原と山地のなかでの山間小盆地に分布する。いずれの空間も、森林が多い小人口地域であった(図1)。

それに対して、港市は一部に内陸の河港もあるが、多くは海域の沿岸に立地することがまず特徴として摘出できよう。アジア多島海の海域は世界の海域の中でも、次のような特異な性格を内在している。1)スマトラ、ジャワ、スラウェシ、ボルネオ島など大きな島が点在し、2)そこが世界でもっとも豊かな熱帯雨林のジャングルとなっている。つまり「森に覆われた海域」では、港市はその背域に依存する領域と関係を持たざるえない。しかも、

その島嶼の内陸には、白檀などの香木を中心とした森林資源と、マルク諸島の丁香(クローブ)、バンダ諸島のニクズク(ナツメグとメース)やスマトラ島の胡椒など香辛料がヨーロッパ人をひきつけた。

背域の構成要素としては、次の4つをあげておきたい。

- 1) その国家が因って立つ生産基盤、
- 2) 中央-地方の支配のあり方
(統治システム)、
- 3) 分配・流通システム、
- 4) 道路・水路などのインフラストラクチャーとそれを規定する自然条件。

東南アジア社会は領域という外郭のはっきりしたものとしてとらえるより、圏という中心から外縁へ徐々に移行するものとして捉えるべきだという議論がある⁷⁾。無数の光源が大小の社会圏を広げていて、相互に重なりあつ

たり、2つの圏のあいだに空白地帯が生まれたりする。このような捉え方は近代の産物である領域国家と相容れないが、その移行プロセスは、この小論の王権とその背域からはきわめて示唆に富むものである。

II. グロリエのアンコール水利都市論の含意

クメール族のアンコール王国(802~1431頃)は東南アジア内陸部に展開した最大の王権である。トンレサップ湖の北、シュムアリップ市の郊外の森林が卓越する平原にある。現存する遺跡の大部分は砂岩・ラテライトからなる石造の宗教的建築物である。

その都城のアンコールトムは一辺4km方格で、ラテライトブロックの高さ8m城壁と堀壕にて囲まれた内部に王宮や主要寺院が配置された正南北方位の囲郭都市である。十字路の

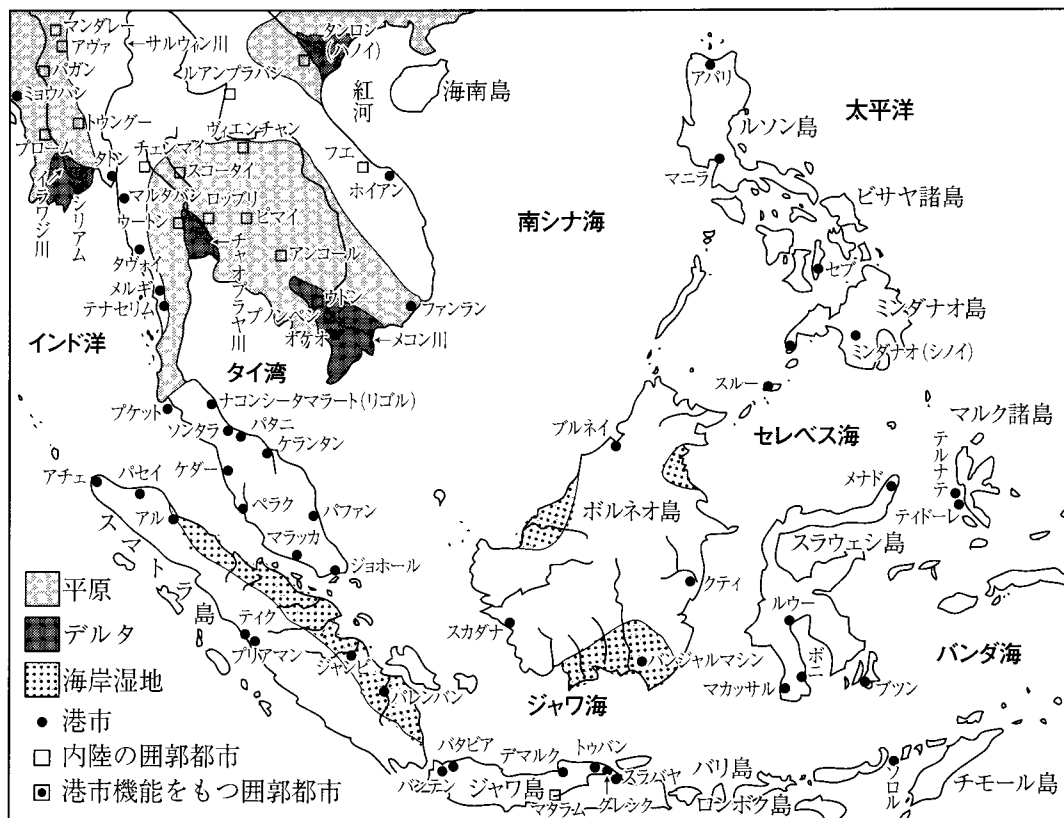


図1 前近代における東南アジアの囲郭都市と港市

中心に高さ45mの高塔が林立する寺院パイヨン（12世紀建設、大乘仏教）を須弥山（メーメル山）にみたて、城壁の外を海とするインド化された宇宙観をこの地に具現させた象徴的なプランである。アンコールトムは何度も城壁が作り替えられ、そのたびに位置も少しずつずれている。現在残る城壁はジャバルバン7世（在位1181-1218）の時代のものである。城門は十字路が囲郭とまじわる東西南北の4つ（東門だけは死者の門と呼ばれる）と、死者の門に平行した勝利の門の5つある。王宮やパイヨンは東面して建てられた。王宮は勝利の門につながる正東西方向に基軸をもつが、パイヨンや南に位置するアンコールワットなどの壮大な石造寺院群の影に隠れて印象が薄い⁹⁾。応地は王宮と神殿の位置関係や規模の相違から、アンコールトムの構造はヒンドゥー教コスモロジーに裏打ちされた都城で、王宮はコスモロジーに埋没し、パイヨンという中央寺院に従属していると指摘している⁹⁾。

また、古来注目されてきたのが、アンコールトムの囲郭の外、東北と西南に位置する巨大な貯水池バライ（東バライ：7120m×1700m、西バライ：8000m×2100m）や、周辺に点在する方形や長方形に近い人造貯水池である。このバライの機能をめぐっては、大別すると、1) 水をとりわけ重視するクメールのヒンドゥー的世界観の象徴的な意味に限定するもの、2) 補助的には水浴・飲料水などに利用されたとする説、3) セデスをはじめヨーロッパ系歴史研究者の多くが支持する灌漑説がある。

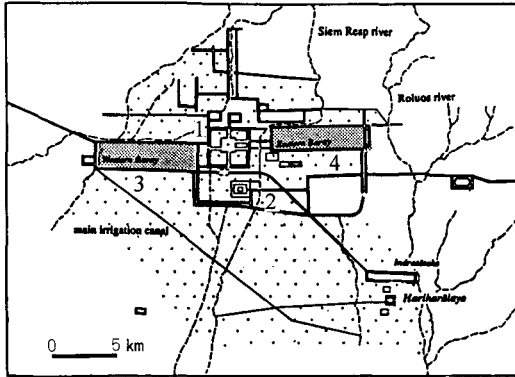
ベルナル・グロリエは3)の立場を鮮明にした研究者であり、彼に師事した石澤良昭などもこの説を取る¹⁰⁾。グロリエはクメール美術や宗教に偏したアンコール研究に、灌漑システムを通じて、社会・経済・土木技術的な側面に光を当てようとした。そのためにとった手法は、フランス極東学院の膨大な遺跡の発掘・修復報告や空中写真、さらにはアンコー

ルがシャムの進入などで衰退し放棄された15・16世紀やそれ以降のポルトガル・スペインなどの記録である。これらの資料からアンコール遺跡群の面的な水路網を復元し、囲郭内部では北東から南西への緩斜面を利用した水の配分を裏づけている。

さらに、グロリエは、アンコールの巨大石造建築群を建設した労働者や一般の人々、捕虜がどこに住み、日常の生活はいかなる経済基盤で支えられてきたかの視角から、規則的な水路網やバライがフルに活用され、飲料水や沐浴、下水などの都市の生活用水的水利用のみならず、囲郭外の集約灌漑地域の水源と推定した。そこでは、安定しているとはいえない降雨を補う乾季の灌漑稲作や、王都の近郊蔬菜地域の存在を想定している¹¹⁾。グロリエの水利都市論は、集約的な水田や蔬菜栽培など、都市の周囲に見られる、都市の食糧消費者を前提とした、近郊農村地域の灌漑、つまり都市の背域・培養圏としての灌漑農業を想定している。そして、アンコール王国の衰退には、通常いわれるアユタヤとの戦争、王権の弱体化、地方の離反などに加えて、過度の水利開発による農業経済の破綻を力説する¹²⁾。

しかし、グロリエが灌漑の論拠とした16世紀のポルトガル人記録書記官ディオゴ・ド・コート（1543頃-1616）の草稿は、西欧人のアンコール見聞記としては詳細で最も古いものの一つだが、ゴアにいたコートがアンコールを訪問した修道士からの情報をまとめたという限界をもつ。当時すでにアンコール王朝自体が廃絶しており、盛時のものではない。

「(都城は)濠がとりまいていて、水深3ブラース(約6.6m)ほどあり、水位が下がるとはない」「石材はこの地から20リユ(約80km)も行かないと手に入らない」「20人の王の命令で建設され、そのため700年かかった」「それぞれの道路は、それぞれの城門を基点とし、2本の水路に挟まれている。都城外部の河川からこの水路を通して、国内各地からの多くの



1.アンコールトム 2.アンコールワット 3.西バライ 4.東バライ

図2 アンコールの灌漑範囲と主要遺跡
(グロリエ, Highamなどを野間改変. アミの部分灌漑域)

小船が食糧、燃料にするマキ、その他の生活必需品を積んでやってくる。住民たちの門前で荷を下ろすことができるようになっていた。どこの家も水路に面した入り口があり、河川に面して他の入り口がある。こうして、都城のごみはすべて濠の外まで運び出され、都城は清掃されていた。それゆえ、この都城を発見した王が宮廷をここに移してからは、世界一美しく、交通の便がよく、清潔な都市となった¹³⁾。

以上のような記述は、建築のための膨大な労働力調達と、都市の生活用水・交通の便宜のための水路のすばらしさを述べてはいるが、農業に用いられたとは一言も書かれていない。しかもトンレサップ湖の底から「大量の米が粃（浮稲）のままで現れ、これはインドでは“パテ”と言っているが、周辺の住民の大半を養うことができる¹⁴⁾と、湖周辺の氾濫湿地での深水稻の重要性を述べる。それによって都市住民の食糧をまかなっているが、平原でみられたであろう散播中耕稲作についてはまったく記述がされていない。

アンコール周辺では、南インドのようにいくつものため池を連結して系統的に水を配分したりすることは行われない。稲作技術も高みでは移植も行われるが、南アジアにみられる乾田直播（散播）中耕型もみられる。イン

ディカ種を直播、2頭だての牛で犁耕し、雑草除去の目的で中耕する。平原のため池は集水域がきわめて限定される。近くを流れる河川の水量に頼れない場合、ため池が巨大であっても、降水を貯めるだけの不安定なものにならざるえない。

グロリエの灌漑に対するバイアスは、ウィットフォーゲル流の絶対的灌漑¹⁵⁾を踏襲しているといわざるえない。しかしグロリエが「水利（水力）文明」¹⁶⁾とはいわずに、「水利都市」としたのは、けだし卓見である。都市と農村を結ぶものとして、灌漑水利、近郊地域などの概念が埋め込まれている。しかし、裏を返せば、アンコール遺跡群から離れたアンコール王国の背域については、この考え方が敷衍される根拠は何もない。したがって、王国の成立与件として、灌漑水利を重視するのは早計であろう。人口の少なさはそのような集約性を必要にしなかったのではないか。

桜井は上座部仏教を東南アジアへ伝えた南インドのタミールナドゥー州のため池（タンク）灌漑地域や、クメールの影響が及んだ東北タイのため池利用をアンコール周辺の農業と比較して、農民的灌漑と王権による巨大なバライ灌漑を区別して考えるべきこと、現在の農業の実態からアンコール時代のため池灌漑農業を類推することはむずかしいが、乾季の作物栽培には灌漑が必須であり、そこにバライ灌漑の可能性を保留した¹⁷⁾。プレアンコール期、とりわけ扶南についてはアンコール王国以上に外部世界との関わりを重視すべきで、タイ湾やメルギなどのクラ地峡の港市群を介したインド洋交易も考えるべきであろう。メコンデルタのオケオ遺跡の囲郭やデルタを横断し港湾や王都アンコールボレイをむすぶ水路の存在などがその証左となる¹⁸⁾。アンコール王国とは、そのような外向的国家が内向的国家に移行した頂点をなすものといえる。アンコール以後のカンボジアの王権はメコン水系・トンレサップ水系に分立しながらも、

アノンペンやウドンにみられるようにすべて河岸に立地し、南シナ海との交流を深めていく。

III. リードの港市論の含意

アンソニー・リード『東南アジア交易の時代 1450-1680』（「第1巻 貿易風の下で」、1988、「第2巻 膨張と都市」1993）¹⁹⁾は、アナル学派総帥のF.ブローデルの『地中海』や『物質文明・経済・資本主義15世紀-18世紀』と、ウォーラーシュタインの「世界システム」を援用しながら、東南アジアの大航海時代というべき15世紀後半から17世紀後半を、「世界システムのなかの一体化した東南アジア」²⁰⁾としての全体史をはじめて描こうとするたいへん野心的な試みである。宗教および生活様式としてのイスラームが東南アジアに浸透して、交易ネットワークが旧来のインドや中国世界との交易に加えて、アラブ世界が加わったことを一つの根拠として、東南アジアの共通世界の成立とみなす。

リードは、大陸部東南アジア史にもかなり配慮し、旧宗主国を中心とした個別国史の膨大な研究蓄積を咀嚼する形で記述がなされているが、もともと著者がインドネシア史を専門とすることから、やはり海域やその沿岸に成立した諸システム、国家、港市に重点がある。そのため、リードの港市論は前域 (forehead) としての交易ネットワークを強調することで港市や港市国家の性格を鮮明にしているが、背域に関しては考察が手薄であることは否めない。

彼の描いた「交易の時代」は、都市的成長が促進された時代と位置づけられる。商業交易をよって発展した都市、イスラーム化した港市群である。つまりアユタヤが1432年アンコール王国を滅ぼしたことに象徴させて、大陸部東南アジアの内陸国家を歴史の舞台の〈周辺化〉として描きだしている。

IV. 港市とその背域

(1) 港市の類型

左のようなリードの都市論に背域概念を組み込むことで、港市国家の類型を考えてみる。なお、ここでいう港市は、植民地としてヨーロッパ諸国によって建設され成長したマニラやシンガポール、サイゴンなどの植民地型と、前近代のインド・アラブ・中国・東アジアの海域商業ネットワークで成立した在来型に大別できる。本報告では、前近代を対象とするため、後者のみを取りあげて、次の3タイプに分類する。

王自身が権力の中心であり独立した国家をなしていたタイプ(A)と、内陸王国の外港として一定の背域をもっていたもの(B)、両者の機能を合わせ備えたもの(C)²¹⁾。

Aは物資の流通を支配するが、背域(後背地)はもたないタイプで、むしろ前域に国際交易ネットワークをもつもので、マラッカをその典型とする。Bはスマトラやジャワのシアク、パレンバン、レンガットなどの港市群で、海岸湿地の無住地をはさんで、内陸の生産・居住域と港が河川・水路で結ばれる。あるいは、河口に外港をもって、内陸の火山山麓の都市と港湾が結合する中部ジャワのマラタム王国(ジョグジャカルタ)のような場合がある。Cはアユタヤに代表される広大な農林業生産の背域をもった王都である。内陸河川ネットワークや山地の産物を集散しつつ、王は王室貿易を港市に結び付けることによって国益を独占するが、同時に港市を諸国の商人に開放する。

アユタヤを除いていずれも港市国家は大きな範域を有しなかったが、港市が貿易における結節点の役割を果たしことが要求され、実質的な機能が重視された。そのため、都市の象徴的なモニュメントを欠き、商品検査所、税関、港務事務所などの施設が共通する。とりわけコスモポリタンな海域世界の港市の多

くは「マレー」と呼ばれ、彼らの出自がインド人、中国人、ジャワ人であっても、マレー語が貿易用語となった。

(2) マラッカ

マレー半島とスマトラ島の上に位置する港市マラッカ(1405-1511)は約100年にわたって東南アジアの国際的な中継交易の主役であった。それはインド洋と海域東南アジア世界を介して、中国・東アジア世界を結びつける役割と場を提供した。マラッカは、東西の国々が長期の風待ち期間に停泊する位置にある。

1390年頃、建国伝承は、スマトラ島のパレンバン出身のパラメスワラが、ピンタン島、シンガプーラ(現在のシンガポール)、ムアル河口からマレー半島を北上してマラッカに定住したことを記す²²⁾。この移動は、明の洪武帝の一連の海禁令による中国人商人の私貿易の衰退に呼応した、ジャワのマジャパイト王国や海峡の小王国の支配の拡大で、勢力を追われたことを示唆する。彼にこの地への遷都を勧めたのは海洋民であるセラテ人であり、パラメスワラは彼らを貴族(マンガリ)として、マラッカ河口に住ませた。自らは隣のバータム川やその中流、あるいはマラッカ川上流のブレタンに居を構え、河口の海洋民とは一定の距離を置いた。しかし、王国の下級労働力となった人々はピンタン島(リオ)の漁民であった。マラッカ王国は、「一貫して政府と労働者の所在が分離していた二重構造」をなしていた²³⁾。

この王国の版図は、ポルトガル人トメ・ピレスの『東方諸国記』の記述によれば、1)直轄地(マラッカ)、2)錫の積み出し港、3)軍港、4)朝貢国、5)シェイクの支配地、の異なる5つの部分からなる(図3)²⁴⁾。

錫の積み出し港は7ヶ所の貴族の支配地となっており、マレー半島西海岸河口に位置する。人口は200~500人のマレー人集落である。錫は鉱脈が風化した砂スズを採取し、これを

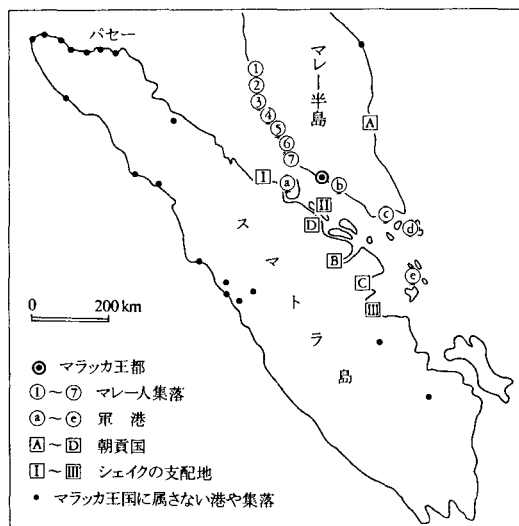


図3 マラッカ王国を構成する5種類の港(高谷好一、注24)による)

マラッカは交易品に加えていった。

軍港はルバト(a)、ムアル(b)、シンガプーラ(c)、ピンタン(d)、リンガ(e)の5つである。ムアルはマレー半島の港だが、ルバトはスマトラ側、シンガプーラ、ピンタンは半島側、リンガはスダ陸棚上のマングローブに覆われた小島の隠れ家というべきものであり、彼らは海賊でもあった。リンガ島には40艘の軍船が常備されていた。外国出身の傭兵隊、奴隷などの存在も知られている。

朝貢国のうち、パハン(A)はマレー半島東岸に位置し、シャムとマラッカに両属していた。あとの3つのカンパル(B)、インドラギリ(C)、シアク(D)はスマトラ島東岸にあり、ミナンカバウ系の民族からなる小王国で、金、樹脂、蜂蜜などを産して、これをマラッカに運んで綿布などを持ち帰った。その一方で、マラッカもまたタイ南部に勢力を伸ばしていたアユタヤ王国とは従属的な関係が続けられた。

シェイクとはアラブ系商人か聖職者が権利を持っていた港である。

王国の支配階級は王族と貴族で、貴族は征服した各地を領地として与えられ、戦争の際

には一定数の軍船を出す義務を負った。

パラメスワラの後を継いだ2代目のスルタン、ムガト・イスカダグ・シャーが初めてイスラームに改宗する。イスラームはまだ王族、貴族、外国人の間だけで信仰されていたようである。パラメスワラは鄭和の遠征隊の存在を後ろ盾に、タイから独立して明の朝貢国になり、永楽帝から満刺加(マラカ)国王に封ぜられた。

王国の官職では、スルタン(王)の下にブンダハラ(最高裁長官, 最高司令官), プングフル・ブンダハリ, ウルバラン・ブッサール(傭兵の長), トゥムゴン(市長, 警察)の4要職があった。その下に、在留外国人のとりまとめをする港務長官・領事役のジャバングールが4名いた。4名の分掌は1) グザラテ人, 2) ベンガル, ペグー, パサイ人, 3) パレンバン, ジャワ, ボルネオ, ルソン, 4) シナ, 琉球, 泉州, チャンパの4地域群の代表であった。1) はグジャラートなど西インド海岸部のアラブ・インド・ペルシャ商人, 2) は東部インド, ビルマ地域, 3) はマレー文化圏, 4) は中国文化圏の国々で, いずれも航路の行き先別に分かれていたと思われる。そして, マラッカは4000人の外国人, 84の言葉が話されていた国際交易港だとピレスは記述している²⁵⁾。

マラッカの交易品は, 西インドの交易品として, 綿織物, アヘン, 雑貨, 東の中国からは陶器・生糸・絹織物・武器, 域内の東南アジア産では森林産物としての香料(胡椒・丁子・ナツメグ), 樹脂, 白檀, 象牙, 獣皮, 生薬, 鉱産物としての金, 錫, 硫黄, 銅, 海産物としての鱧甲, 真珠貝, 珊瑚, 干魚であった²⁶⁾。

王や貴族は交易の場を提供するだけで, 当時のマラッカは基本的には外国人商人による私貿易である。したがって王国の収入は貿易の独占ではなく, 交易に伴う物品税・輸出入税であった。ほとんど無住の地に王国が作ら

れたマラッカでは, 土地からの税(地税)という概念は存在しなかった。

ただ, マラッカが南海貿易のセンターとなり得たのは, マラッカ海峡の中央に位置する地理的位置に大きく依存している。帆船によってアラビアやインドからの西の商人と中国をはじめとする東の商人が自国との往復に貿易風の関係で2年を要していたのが, マラッカを中継ぎすることでその短縮が可能となった。東北モンスーンと南西モンスーンの間のなぎの6ヶ月間は物資がマラッカの倉庫で保管されることになり, その関税・保管料・物品税がマラッカ王室の財政の基礎であった。

王国は周辺の各地を武力で征服して領土を広げる。その範囲はマレー半島南部, ほぼ現在のマレーシアの地域と, スマトラ島中部の海岸地点であった。こうして王国は東南アジアの諸島部における一大国家となったが, 1511年, ポルトガルのアルブケルケが艦隊に占領され, 国王マフムード・シャー(在位1480ころ-1511)は, 半島南端のジョホールに定住してジョホール王国を建てた。

(3) アチェとパレンバン

港市類型Bにあたるものとして, スマトラの2港市アチェとパレンバンをとりあげる。アチェはマラッカ海峡のスマトラ島側の入り口に面した港を持ち, 直接の背域がそれに地理的に連続する。パレンバンは南部の低湿地の河口からムーシ川を80km遡った丘陵との境に位置し, マレー人よりなる16世紀後半に成立した港市で, ジャワ海に面した河口には港灣を持たない。

アチェや東岸の小港市国サムドゥラ・パサイやペルラクは, 13世紀末に王や住民のイスラーム改宗がなされた。これは東南アジアでもっとも早くイスラーム化した港市国家群である。16世紀以降, バンダ・アチェに拠るアチェ王国が胡椒貿易の隆盛を基に勢力を拡大, この地方を支配下に置いた。同王国はイスカダグ・

ムダ治政下(1607-36)に最も栄え、版図をスマトラ南西岸にまで拡大したが、17世紀末から内紛が続き衰退した。

この港市の内部構造は、王とその王族、貴族のみが城壁で囲まれた王城内に居住し、都市全体を囲郭する形態はみられない。王と王妃が住む部屋に達するには中庭を隔てて7つの門を通過せねばならない。外側の中庭には競技用の象や砲兵の弾薬庫、受付などの部屋があった。いちばん主要なモスクは宮殿にすぐ隣接して位置することが多く、それが港市のランドマークとなっている。そして多くの場合モスクに隣接してイスラーム学校や研究所が位置していた。

パレンバンはかつてシュリピージャヤの首都として栄えたが、隣の港市国家バンテンが胡椒産地の拡大を狙って攻撃した(1596年)のを契機として、自らの地位を保持するため、ジャワ中部に興ったマタラム王国の庇護をうける。1625年、マタラムに7頭の象や貢物と使者を送って臣属している²⁷⁾。その一方で貿易の利益を求めて、オランダ東インド会社が商館をパレンバンに置くことを促し、マラッカとの交易を求めて背域の胡椒栽培地を拡大し、それを買い占めて価格操作や出荷統制によって利益を手中に収めた。

この事例は、港市がしだいに未開発の背域に触手を伸ばして、ローカルな交易の一端の利益を得ようとしたものといえよう。

V. ビルマにおける王権・囲郭都市とその背域

(1) タトン、ペグー、ミョウハン

——沿岸の港市

アングマン海に面するタトン(スダワマワディー)はモン族の都として、少なくとも5世紀には東インド・セイロンとの交流があり、ヒンドゥー・上座部仏教がインド洋経由でビルマに最も早く移入された地の一つである。都城はほぼ現在のタトン市街を包含して、海

岸平野から一段高い段丘上からタトン山への山麓丘陵にかけて立地する。南北に細長い長方形(2310m×1200m)で、面積2.7km²、現市街の東、北、北西隅、南などに濠・城壁を残す。中央に324m×345mの王宮が南面して位置した。二重の土塁があり、その間は濠になっている。なお北辺は三重の土塁となっている。当時の海岸線は鉄道のすぐ西から南西あたりに位置し、海に向かっての堅固な土塁・濠で囲まれた囲郭都市であり、沿岸・海洋交易の港の機能を有していたと推定される²⁸⁾。後背地は山が迫り、耕地に乏しかったから、ベンガル湾の海上交易を主とした、港市的国家であった。マヌハ王治世の1057年にパガン朝アノータター王の攻撃を受け滅亡したが、その文化はパガンに引き継がれる。

ペグー(現バゴー)はタトンの後裔となる港市で、シットン川の河口に近い海岸低地に位置する。こどもモン族が早くから開発したところで²⁹⁾、825年にタマラ、ウィマラの双子の兄弟が町を築いたとされる。当時のペグーはマルタバン(モウタマ)湾が今よりも内陸まで入りこみ、海港としての性格が強かった。海上を通じて南インドとの交渉・交易があったらしい。また、シットン川を遡って、陸路で結ばれた雲南の南詔にも使節を送っている。

1369年にハンタワーディー・ペグー朝のピンニャウー王(在位1353-85)によってペグーに本格的な王城が築かれ、その子ラーザダリ(在位1385-1423)は、イラワジデルタの要衝バセインやミャウンミャまでを支配化において、王国を3省96郡に再編した。15世紀後半から16世紀には遠隔海洋交易がペグー王国で隆盛であったことは、トメ・ピレスの記述から判明する。

「この国はわれわれが今まで見知ってきたどの地方より肥沃な国であり、シアン(シャム)よりも肥沃でジャオア(ジャワ)とほぼ同じくらいである。海岸には三つの港があり、それぞれ三人の総督(ゴヴェルドナール)が

いる」として、コピミー（下ビルマのバセイ
ンカ）、マルタマネ（マルタバン）、ドゴン（ヤ
ンゴン）の3港をあげている。主な商品は、
米、ラック、安息香、^{じよっこう}麝香、宝石、ルビー、
銀、バター、油、玉ねぎ、にんにく、からし
などを、貿易風を利用して運ぶ。王国に入荷
する商品としては、錫、水銀、銅、フルセレ
イラ（銅・錫・鉛などの粗質の合金で貨幣の
代用となった）、ニクズク、胡椒、丁子など
で、その多くはパサイやマラッカとの交易で
持ち込まれたものである³⁰⁾。

以上の記述からわかることは、ペグー王国
がほぼ沿岸一帯を掌握して相離れた3つの交
易拠点を持っていた点である。しかしペグー
の町自体は現在よりも3kmほど東に位置し、シ
タン川支流を通じてベンガル湾とむすばれて
いた。しかし、マルタバンやダゴンに比べる
と港湾機能としては不利な位置にあり、17世
紀初頭にはシタン川・ペグー川の堆積で港
湾機能そのものが失われてしまった³¹⁾。

ペグーの最盛期は、タウングー朝のバイン
ナウン王がここを都とした16世紀で、アラウ
ンパヤー王がモン族を征服した1757年に焼き
払われるまで王城があった。王城はほぼ方格
で1辺が3400尋（6222m）の城壁・濠で囲ま
れ、それぞれに4つの門があった³²⁾。王宮は中
央に東面して位置していた。市街の東トゥダ
タナ丘の上には釈迦の遺髪をまつというシュ
ウェモードー・パゴダがある。

モン族が建国したペグー王国は、タトンの
ような後背地をもたない狭い港市的な国家か
ら、イラワジデルタを掌中におさめることで、
米の余剰やラック、上ビルマの特産の宝石な
どをマラッカ・パサイなどマラッカ海峡の港
市へ販売する商業的性格を強めた。しかし、
つねに周辺諸国との戦争にあけくれ、とりわ
けビルマ族との軋轢は、ペグーの防御的な機
能を長らく維持させた。ペグーからはシタ
ン川を遡ると、タイ族のシャン高原や、パガ
ンからビルマ族が逃れて打ち立てたタウングー

王朝の王都タウングーがある。かかる背域を
にらんだ地点ゆえ、港湾機能では劣りながら、
ラングーン（現ヤンゴン）が植民地的発展を
とげるまで、下ビルマの中心として栄えた。

アラカン山脈を隔ててベンガル湾の一角に
は、1785年まで独立を保っていたアラカン王
国がある。この地域は起源前後からインド化
し、さらにムガル帝国の影響もあって、イス
ラーム教も混交した、独自の仏教文化をもっ
ている。その王都ミョウハン（ムラウー）
は丘陵と河口デルタが入り組んだ地に長方形
（約420m×330m）の王宮がほぼ東面する。
3重の煉瓦・切石の城壁があり、最も外側の
囲郭は550m四方の方形（東南隅は川によって切
られて実際は五辺となっている）で、王宮の
面積が広いことが際立つ³³⁾。15～17世紀にはポ
ルトガルやオランダとの交易で繁栄していた
が、1785年コンバウン朝ビルマに征服されて
滅んだ。このアラカン王国の例は、さしたる
産物はないが、地形的にも孤立した山が迫る
沿岸部にあったため、交易や海賊行為を中心
としながらも、一定の背域での生産基盤（稲
作）を持った王権が永続した例であろう。

(2) パガン

イラワジ（エーヤワーディー）川中流部
の上ビルマ一帯には、インド化した先住民族
ピュー（1～9世紀）が定着し、プローム郊外
にシュリクシェトラ（タイエーケッタヤー）
を建国した。長円形の城壁で囲まれた14km²
の内部にヴィシュヌ神、弥勒菩薩などの遺構が
あり、中央には円のほぼ王宮址がある。城壁
には32の門をもつ。須弥山をかたどった王宮
の王は32の封臣に護られて鎮座するインドラ
神を王とする宇宙論にむすびつく³⁴⁾。

そのピュー族を継承しつつも、より巨大な
王国を築いたのがイラワジ川左岸べりに位置
するパガン王朝（現在の表記法ではバガン）
である。王宮は9世紀に建設された周囲1200
mの小さな市壁内にある。この城内には、ほ

かにゴードーパリン寺院、タビュニ寺院、学校跡などにもあり、河港も付近にあったとみてよい。しかし、アーナンダー寺院、ザマヤンジー寺院ほか4000を超えるといわれる石造寺院・パゴダの多くは、市壁外半径約6kmの範囲の荒涼としたサバンナ景観のなかに点在する。パガン一帯は、年間雨量は500~700mm前後の東南アジアで最も乾燥したのドライゾーン地域であり、付近には矮小な灌木やトゲのあるサボテン類しか見られない。

アンコールのバイオンにみられたような須弥山的コスモロジーはパガンでは顕著でなく、矩形都市プランも残存する道路や王宮の位置から存在には否定的である。都市プランに宇宙観を凝集するよりは、荘厳な風景の中で建塔という行為を示威することで、南方上座部仏教の至高の境地を歴代の王権はめざしたのではないだろうか。パガンの王はモン族の都タトン攻めて、王や僧侶をパガンまで連行して正統仏教を熱心に広めていった。

南方上座部仏教の教えでは、来世に救済されるためにはできるだけ現世に功德を積み重ねなければならない。そのための方法としてより重きを置かれるのは、個人の日々の仏への帰依・信仰というよりは、寺院への金品や土地の寄進である。そして至高の方法が寺院建立になる。アウン・トゥンは、寄進を再分配する巧妙な上座部仏教のメカニズムに焦点をあて、碑文などから推定できる全盛期のパガン王国の灌漑耕地は57万エーカーとし、11~13世紀の300年間にその63%の耕地、2万人以上の人間、1900kg以上の銀がサンガ(仏教教団)に寄進されたと推定した³⁵⁾。

アンコール王国では巨大石造建築が無償の強制労働や移入労働力によってされたため、著しい人的資源の消耗と浪費が起り、結果として王国の疲弊を導いたといわれるが、パガンでは、寄進された財で賃金を支払って労働力を集めた。石工や仏師、それに彼らに食糧や燃料・サービスを提供する諸々の就業機会

が王都の周囲にあったといえる³⁶⁾。

しかしこの王都にパゴダ建設のために多くの人々をひきつける魅力があったとしても、その王国の経済を支える背域は、150kmほど離れた、やや水量の安定した扇状地的流域にあった。チャウセ、サガイン、ミンブー、ムー河谷平野に代表されるイラワジ川支流に形成された扇状地の水路灌漑やメクティーラ、ヤメティンによるため池灌漑の成立とセットにしてパガン王国の農業生産基盤を考える必要がある³⁷⁾。

チュウセ地方には11のカヤイン、ミンブー地方には6のカヤインがある。このカヤインはこの地方独自の歴史的行政区画で、その中心集落も城壁で囲まれた方形プランであったが、都市とはいいがたい³⁸⁾。この集落は地方の首長社会の核となるものであったが、それを束ねる形でパガン王権があった。この背域で生産された米をはじめとする農産物はイラワジ川水運でパガンに運ばれ、王都の消費にまわされたと考えてよい。

パガンは政治・宗教的中心ばかりでなく、内陸の港市であった。しかも、上ビルマのチドイン、イラワジ合流点から少し下ったところに位置し、陸路で雲南の大理国などとも結ばれていた。水量が豊富で、途中に滝などの難所がないイラワジ川は河口からも船の乗り換えなしでここまで到達できる。またパガンへ陸路の入り口、現在では土着信仰のナツの聖地ともなっているポパ山がパガンから平地帯を東へ向かったところ50kmに位置するのも興味深い。ここを經由してシャン高原(タウンジー方面)へは最短ルートで結ばれ、広義のタイ族(シャン族も含む)文化圏³⁹⁾との結節点ともなっている。

(3) アマラプラとマンダレー

パガン朝以後のビルマ族・あるいはシャン族の王都は、いずれもパガンよりも上流のイラワジ川本流沿いにある。アヴァ(インワ)、

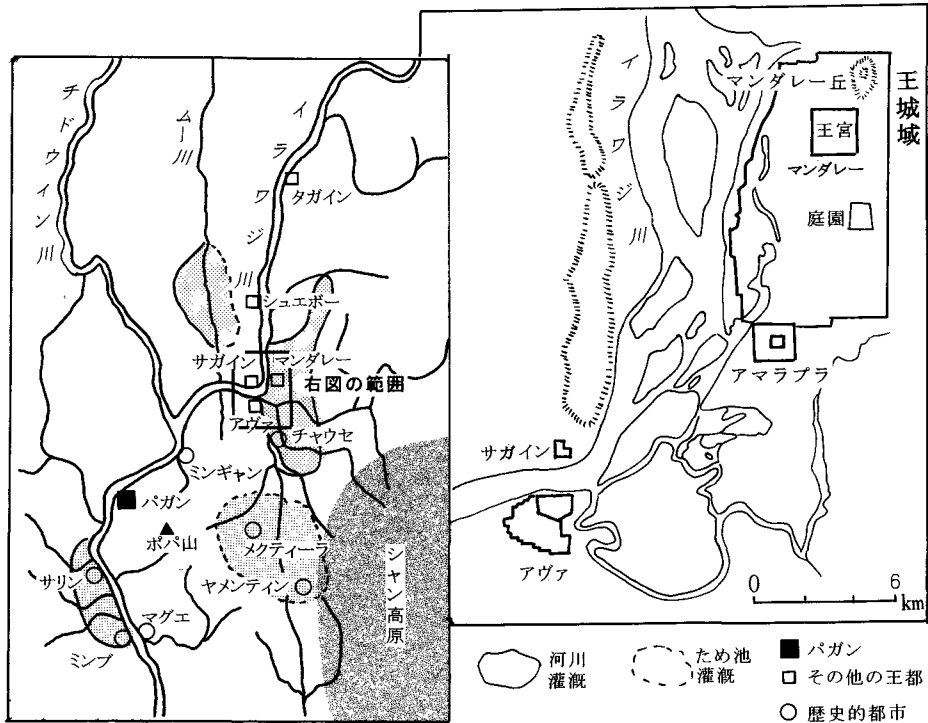


図4 上ビルマの灌漑地域と王城
(注34), 37)などにより野間編図)

アマラプラ、マンダレーなどの囲郭都市がそれにあたる⁴⁰⁾。アマラプラはとりわけ完全な1辺1マイルの正方形で城塞と濠に囲まれ、各辺3つ、全部で12の城門があった。方格道路によって144の区画に区切られ、中央の16区画が御所(王宮)とされ⁴¹⁾、理念的なアーリア都市⁴²⁾に近い。内陸水運・港湾機能をもっていたとみてよい。

最後のコンバウン王朝の王都マンダレー(1857年遷都)以外の王都は遺構をあまり残さないが、占星術などによって位置が選定され、王宮は囲郭の内部に東面する共通点をもつ。マンダレーでは、「黄金をはりめぐらせた区域」として東西21km、南北51km、11万ヘクタールが定められた。ここでは生き物の殺生が禁じられ、境界石柱が置かれた⁴³⁾。この領域は王宮、王城の外に広がる王都の外縁というべきもので、マンダレーの河川灌漑地域とほぼ一致する。この事実なども、王都の位置はたびたびかわっても、直接の生産基盤として

の背域は、一貫して上ビルマの灌漑地域であったことのひとつの傍証になる。

VI. タイにおける王権とその背域

(1) ムアン型国家

——チェンマイとスコータイ

タイ族の南下はビルマ族よりも遅れたが、その王城の形態は、基本的に矩形プランである。チャオプラヤ水系やメコン水系の上流に位置する北部タイや雲南のシブソーンパンナ地方には多くの山間盆地が点在し、タイ系諸民族が主として水田稲作を行い、その首長を中心にムアンといわれる城市を中心とした小国家を形成していた。〈ムアン(城市)の人〉を意味するコン・ムアンとも呼ばれる。その直接の支配域はほぼ盆地内部に限られ、その周辺の山地に居住するアカ、メオ、ヤオなどの山地民族とは交易で交流があるにしても、領域的な支配はおよばなかったとみてよい。

タイ・ユアン族は北部タイで優勢なタイ系民

族である。タイ最北、ラオス・ビルマ国境をのぞむメコン河岸の町チェンセンの王子として生まれメンライ(Mengrai)は、父の後を継ぎいで1262年にチェンライの町を建設し、チェンコーン、ファーンなど北部タイの盆地の小国を統合していった。さらに、周辺のタイ系の王と同盟を結んで、91年北部タイにあったモン族のムアン、ハリブンジャヤ(現在のラムプーン)を攻略した。彼が1296年にチェンマイ盆地、ピン川右岸に建国したのが、「百万の水田の国」といわれるラーンナータイ王国である。13世紀はアンコール・パガンといったインド化した大平原国家が衰退し、遅れて南下してきたタイ族のムアン型国家が「沸騰」するタイ史の画期である。

王城は一辺1.75kmの方形の城壁で囲まれ、ほぼ正南北に位置する(図5)。囲郭の外をつなぐ城門は、各辺に1つずつ、都合4つある。そこを通過する道路を主要なもののみならず東西方向の軸がほぼ直線的であるのに対して、南北は斜行する。しかも内部道路のパターンは市街地になっているために後に加えられたものも多いと推定されるが、規則性はない。さらに現在の旧市街をほぼ包含する形での濠・土塁が南から東を半円状に囲み、市街を画する。

重要な寺院は、ワット・ブラシン(1345年創建)、ワット・チェディ(1431年)である。前者は東西道路上にのる仏寺で、図書館といわれる。後者は2本の道路の交差するほぼ中央、南北道路軸上にはのる。最古の寺はメンライ王自身が1297年に創建したワット・チェンマンであり、それは南北道路の北端に位置する。王宮はその向かいに東面して存在する。城壁の内外に群立する寺院のなかに王宮も埋没し、両者は表裏一体の関係として存在する。タイ系諸民族は、アンコールやパガンなど直接インド化した平原の大国家と異なり、南方上座部仏教をモンヤクメールなどの文化から間接的に受け入れて、十分な消化をおこなっ

てきた。そこにはデヴェラジャ(神王)思想によるコスモロジーの反映ではない、タイ独自の仏教文化が体现されている。

ポート(祠堂・布薩堂)、チェディ(ストゥーパ)、ウボッソー(戒壇院)、ヴィハーラ、ホ・トライ(経蔵)など、各種の形式と機能を持った建築群が混在すること、王は仏法の擁護者という立場で、仏教教団(サンガ)を経済的にも支え、その護持を仏像や絵画・壁画などを創作することによって示そうとした⁴⁾。この時期の上座部仏教における政治統合は、空間的な配置にさほど関心を示さなくなってきた。王宮の位置の任意性、内城内の道路パターンの不規則性などがあげられよう。

13世紀建国されたスコータイも、チャオプラヤ支流のヨム川の扇状地に建設されたムアン型国家である。東西2.6km、南北2kmの矩形の城壁を持った王城内では、須弥山の位置づけは薄弱で、内城の道路プランも明瞭でないが、バライにあたるため池が囲郭外北に位置することは注目に値する。

(2) アユタヤ——デルタの港市

アユタヤはタイ族によって400年以上(1351—1767)にわたるアユタヤ王朝の首都として栄えた。ロップリ、スパンブリなどチャオプラヤデルタの古デルタ周囲に位置した都市国家群を束ねて、ウートン(U-thong)の藩侯であったラーマティボディ1世によって、チャオプラヤ川、ロップリ川、パサク川の合流点の要衝に建設された。つまり、タイの王権発祥の地といわれるスコータイ王国とは直接のつながりはないのである。市街は河川で周囲を囲繞された長円形の川中島にあり、後に周囲に城壁が建設されている。

アユタヤの都市プランにおいて、王宮の移転があったものの、いずれも一等地を占める。旧王宮はワット・ブラシー・サンペットの位置にあった。ド・ラ・ベールのアユタヤ市街図によると、城壁外の南部に川を隔ててポル

トガル、オランダ、コーチシナ（ベトナム）、モン、中国、日本人、マカッサル人などの居留地が設けられた。中国には朝貢貿易という形をとった国家間交易が頻繁行われたが、中国人の居留地だけは城壁内にも設けられ、その重要性が推察できる（図6）。

17世紀にオランダ東インド会社の商館がここに設けられ、その商館員として赴任したファン・フリートの『シアム王国記』⁴⁵⁾のアユタヤの記述は最も初期の詳細なものである。

都市の周囲は厚い石の城壁で囲まれていたが、1634年に大部分が改築され、下の部分は石の土台で強化されている。城壁の外側、対岸にも多くの町、村、農園、農民の住居、寺院、修道院および尖塔が密集して建てられ、多くの人に住んでいた。市内は数本の直線道路が縦横に走り、多くの便利な水路が作られている。洪水になると、水が溢れ、多くの場合、街路の上をすべての家屋のところまでプラウ（舟）を漕いで行くことができる。家屋粗末であるが、市内には約400の立派な寺院と修道院が点在し、いずれも精巧で豪華な建築で、金箔や偶像で飾り立てられている。国王の歳入の多くは米であるが、蘇木、錫、鉛、硫黄などの商品取引に国王が関与し、ただ陛下の商館員からだけ外国人に売りわたされる。このほか、関税からの利益、臣下、重だった

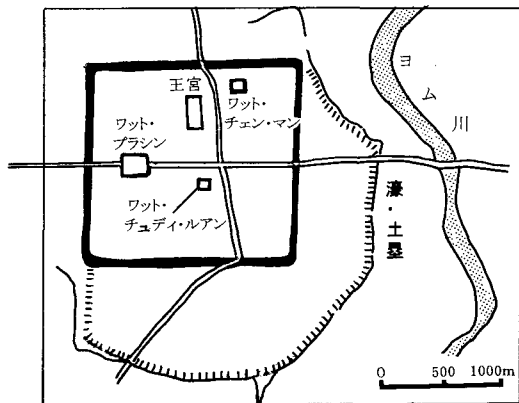


図5 チェイマイの王城と主要寺院・王宮

人々、および各州の総督からの贈り物がある。

これらの記述から、地税はほとんど意味をなさず、貿易の取引にかかわる税収が国家財政のおきな割合を占めていたと推定される。17世紀の全盛期アユタヤ王朝は、南はマレー半島、東はラオス・東北タイ一帯、北はチェンマイ王国を服従させ、南はトウングー朝の一部をも版図に入れた東南アジア有数の強大王国であったが、その実は領域国家とはいいがたく、その外縁はきわめてあいまいで可変性に富んだものであった。

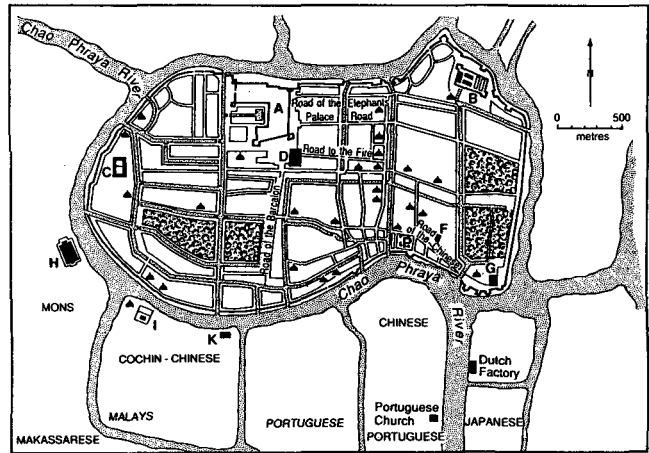
インド洋を経由する西の国々との交易は、テナセリム、メルギという現在はミャンマーのアラカン地方に属する海港から陸路で地峡部を越えて、王都アユタヤへもたらされた。つまりアユタヤ以外にインド洋（アンダマン海）側に外港をもっていたと推定される。とりわけコロマンデルとスラートからの織物が重要であったことをファン・フリートは記述している。ほかに国外からもたらされる物産として、丁子、ニクズク、胡椒などの香辛料、白檀、日本からの銅・鉄・細工物、宝石などであった。国産の商品としては、象牙、安息香、蜜蠟、鹿皮、金、ゴンマラッカ、蘇木（染料にするスオウ）、錫、鉛、鮫皮、米、黒砂糖などで、大別すると、山の産物と鉱産物、それに米を中心とした農産物であった⁴⁶⁾。米はマラッカ、ジャンピ、パタニ、マカッサルなどのマレー海洋世界の港市国や中国が市場となっていた。

文字通り、アユタヤは中国・琉球・イスラーム商人・ヨーロッパの商人が蝟集する国際交易港であり、しかも上流に広大な背域をもつ、河川交通の要衝に位置していた。とりわけ、東北タイ、ラオス、北タイ地域などとのつながりが強い。アユタヤの人口はかなり過大と思われるが、17世紀の記録では20万人前後とされる。この人口を支えたのは、中央平原、とりわけ氾濫原での深水稻を中心とした米であった。15世紀のアユタヤでは、リードの推

定によると、30艘のジャンク船で、一平均ジャンク船400~500トン積みとして1万トンの輸出货量があった⁴⁷⁾。

アユタヤ王朝の王は商人であるという記述はすでにファン・フリートによってもされており⁴⁸⁾、国家自体が商人国家・交易国家といえる性格を持っていたことは疑いない。しかし、その広大な背域については、すべてを領域国家として押さえていたという集権国家的性格については疑義が提出されている。その根拠として、アンコール、チェンマイ、マラッカ、メルギ・テナセリムにしても、スコータイの併合を除いて独立を維持しており、しかも、集権的といわれる法も実際の運用は王の気まぐ

れや地方権力との妥協の上に骨抜きで実践されたことが判明している⁴⁹⁾。このような疑問からタイ史家スネートは「マンダラ型国家」・「分節国家」の概念でアユタヤ王朝を捕らえることを提唱する⁵⁰⁾。マンダラ型国家とは、その体制の持続がもっぱら個人の資質とその支配者に忠誠を誓う一定の世代に属する家臣団の存在に依存する個人ネットワークをもとにした国家類型である。分節国家は光源から発する光が距離に逆比例して弱まっていくように、権力の及ぶ範囲は中心（王宮のある首都）から遠ざかるにつれて弱まり、最遠隔地では支配は象徴的なものにとどまる。一方でその周縁部では複数の地方権力が中心と相似的な大小の支配組織をもっていて、別個の中心を発生させた場合には忠誠の対象を変更するかの可能性がたねに存在するような国家のことである⁵¹⁾。ピサヌロークの鎮守府設置（1438年）は、唯一併合したスコータイを押さえ、チェンマイの南下に備える意味があった。



▲ その他の寺院 — 道路 — 水路 市内緑地帯

- | | |
|------------------|-----------------|
| A 王室 (ワット・ルアン) | G 学校 |
| B 前宮 (ワンナー) | H ワット・チャイワックナラム |
| C ワン・ルアン | I フランス司教 |
| D ワット・プラシー・サンペット | K ワット・プッタイスワン |
| F 中国寺院 | P ファウルコンの屋敷 |

図6 1687年地図にみるアユタヤ (Reid, 1992による)

VII. ベトナムにおける王都とその背域

ベトナムは東南アジアで唯一「中国化」した国である。ベトナムは中国から、漢字、儒教、科挙制度、地方行政区画、均田制度、文物などを受け入れた。都城プランも中国式の北を上位として南面する方形プランを基本的には踏襲したといわれる。ベトナム民族（キン族）は西南中国から紅河（ホン川）河谷に沿って下り、紅河デルタに定着した。

1110年に李太祖が昇竜城（タンロン）をハノイに築いて、最初の統一王朝である李王朝を創立する。それまでの都がナムディン省のホアルーというデルタ縁辺のカルスト山塊に囲まれた閉鎖空間にあったから、洪水の危険と隣り合わせの紅河デルタの氾濫原への進出は、背域という点からも大きな変化である。

ハノイの地は隋代に宋平城が築かれ、さらに交州支配のフロンティアとして唐代621年にこの地に「子城」を、767年に唐の張伯儀が「羅

城」を築いたと『大越史記』にある。前者が重要機関を取り囲む小規模の城壁、後者が都市全体を囲む城壁の意であるから、すでに二重の囲郭都市が中国の手によって建設されていたとみてよい⁵²⁾。北を上とする中国式都城プランが卓越するが、方形原理はデフォルメされてしまった。しかも、ベトナムの王城の特色は、手工業・商業地区が王城に隣接した「36坊地区」に形成されたことである。フォンとよばれる同業者町の形成が17世紀にはみられた⁵³⁾。そこに集住したのは、デルタの農村における特定の農村工業の担い手であった。城下町の繁栄を図るために、領主が商人集団を呼び寄せた日本の城下町に類似するが、このような事例は前近代の他の東南アジア地域では一般的ではない。その一方で、中国人集住地区は2つのフォンとその周辺にすぎず、きわめて小さく、経済的な力も弱かった⁵⁴⁾。

紅河は水運があまり機能しない荒れ川で、堤防を築きながら集落を自然堤防上に形成していった。デルタの農村、領域国家としての成熟がすでに15世紀にクライマックスを迎える点でも、他の東南アジアデルタと大きく異なる。中国との海路は、ハロン湾の多島海が暗礁も多いため、あまり利用されなかった。そのため、ハノイは2本の河川の合流点という好位置にありながら、海路とつながる内陸河

港としての意義はあまり高くなかった。朝貢システムによる中国交易を除いて、国際交易からハノイは地理的位置の不利さもあってはずれていき、内向的な展開に向かっていった。南中国からの交易船、中部ベトナム（フエ、ホイアン）直接をめざすことが多かった。雲南との陸上交易に活路をみいだしたが、デルタ域内での自給体制が早くに確立されたことも内向的な国家にむかわした要因として大きい。

中国式の方形の囲郭都市は、鄭王朝の別派と考えられるクアンナム朝（広南）による中部のフエにも移植されるが、ここも港湾には恵まれていない。むしろチャンパ（占城）の衣鉢をつぐホイアンがそれを代行していった。ホイアンは16世紀後半に現れ、17～18世紀に国際的な貿易港として栄えた。沿岸の砂丘に閉塞されたラグーン位置し、現在は土砂の埋積でほとんど港湾機能をなしていないが、当時は、河口にも近く、風波を避けられる位置にあった⁵⁵⁾。山に隔てられ、背域は貧弱であるが、南シナ海交易、とりわけ初期は、日本との関係が深く、朱印船貿易によって繁栄し、伊勢の豪商角屋七郎兵衛をはじめ、多くの日本人が移住した。日本人町は来遠橋を渡った市中の一區画に自治を認められて存在した。当時の交易の中心は、絹、生糸、ショ糖の日本への輸出であった。1635年の徳川幕府によ

表1 王権とその背域類型試案

類型	主体	生態域	コスモロジー	防御能力	構成要素	規模	事例
A ムアン	王城+背域	山間盆地 平原	○	++	王宮 土地、市場	小	チェンマイ スコータイ
B ブラ	王城+背域	平原	◎	+	王宮、幹線道路・水路	大	アンコール バガン
C ヌガラ	港市	沿岸	×	+++ (備兵)	王宮、モスク、 港務事務所、倉庫、市場	小	マラッカ
	港市+背域	熱帯湿地、森林	×	++ (備兵)	同上、土地	中	アチェ パレンバン
D 結合型	王城+背域 (領域国家)	デルタ	△	+	王宮、港湾、税関、市場、寺院	大	アユタヤ ベグー

(注)コスモロジーが都市プランに強く反映しているものを◎とし、○、△、×と順次その度合いが弱くなっていることを表す。

る渡航禁止令以降、日本人町はしだいに衰退したが、代わって福建出身の中国人（中国町を形成）によって中国やシャム・フィリピンなどとの交易が行われた。

VIII. おわりに

石井・桜井による19世紀までの東南アジア史の概説書⁵⁶⁾は、内側からの新しい歴史をめざして、国家というヨーロッパが作り上げた概念ができる以前に、東南アジアの人々自身が作り上げたさまざまな形の政治統合を中心に据えて、統一のとれた魅力的な記述スタイルとなっている。ここで用いられたムアン、プラ、ヌガラという用語を借用して、これまで縷々述べてきた前近代の王権とその背域についてまとめたのが表1である。

ヌガラとは、マレー世界に典型的にみられた港市国家のことである。その肥大過程は、デルタという20世紀以降の東南アジアの首座都市の突出、巨大都市化は、ヌガラが背域を積極的に取りこむことによって、いいかえるならばDのタイプへ移行することによって実現された。

プラとは、クメールのアンコールに典型的にみられる神王（デヴァ・ラージャ）をいだける平原の国家である。パガンではインド化コスモロジーは都市プランには明瞭に示されなくなるが、上座部仏教における功德を求めて、無数のパゴダ建塔がなされた。アンコールにみられた水や竜を重視した象徴性の代わりに、ある意味では実質的な労働調達や経済基盤の整備がなされた。しかも、内陸の地理的不利さを、平和的には内陸水運や陸路の整備に向かわしめた。それに加え、上ビルマにアーリア型の方格囲郭都市が他の地域・国に比べて多いのは、南インド・スリランカからのより直接的な影響とその内向化による保持と結びつく可能性も指摘しておきたい。

東南アジアの王権史は戦争・抗争の歴史といわれる。前近代東南アジア王国の社会原理

は、代々の王統の神聖性が重視されたにもかかわらず、結婚の自由度が高く、養子取りがさかんであり、双系的な系譜観念も手伝って、王位継承者の間の競争が激しかった。しかし全体としては絶対的人口過少という状況のもと、王権が領土の獲得よりは、敵国の人間をいかに獲得するかに血眼になったことは理解できるような気がする。王権による人格支配は、領土・領域という概念を著しく希薄にしたといえる。戦争で獲得した捕虜を自国の労働戦力とすること、それが東南アジア的な意味での奴隷であった。リードはいみじくもこういいている。「戦争の目的は利用できる人口を増やすことであって流血の戦闘によって人を失うことではない。そこから、威嚇的な大軍を動員して敵を劣勢に追い込み、最初の戦闘に勝って超自然の力が自分の側に付いていると思わせることに最大の関心が払われた」⁵⁷⁾。

〔付記〕本研究には次の文部省科学研究費を使用した。記して謝意を表したい。①「ユーラシアにおける都市囲郭の成立と系譜に関する比較地誌学的研究」、平成6～9年度基盤研究(A)(2)、研究代表者：戸祭由美夫。②「アジア6大デルタの農業・農村発展に関する総合的研究」平成9・10年度海外学術調査、研究代表者：海田能宏。

〔注〕

- 1) セデス, G., 辛島昇・桜井由躬雄訳『インドシナ文明史』(第2版), 白水社, 1975, 58～59頁。Coedès, G., *Les Peuples de la Péninsule Indochinoise*, Dunod.
- 2) ハイネ＝ゲルデルン, 大林太良訳「東南アジアにおける国家と王権の概念」大林太良編『神話・社会・世界観』, 角川書店, 1972。Heine-Geldern, R. *Conceptions of State and Kinship in Southeast Asia*, Ithaca: Cornell Univ, 1956.
- 3) 石井米雄『「港市国家」としてのアユタヤー中

- 世東南アジア交易国家論」(石井米雄・辛島昇・和田久徳編著『東南アジア世界の歴史的位相』, 東京大学出版会, 1992), 75~76頁。
- 4) 「交易の時代」は、オーストラリアの東南アジア史家アンソニー・リードによって、物質文化や社会組織なども含めて新たな意義付けがされた。リードは国王が交易の富を、ポルトガルの傭兵や鉄砲など強固な軍事力にふりむけて強大化していく過程を重視する。アンソニー・リード著、平野秀秋・田中優子訳『大航海時代の東南アジア I - 貿易風の下で -』, 法政大学出版会, 1997. Reid, Anthony, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, I: The Londs of below the winds* 1988.
- 5) ペルナル・グロリエ著、石澤良昭・中島節子訳『西欧が見たアンコール-水利都市アンコールの繁栄と没落』, 連合出版. Groslier, Berhard P., *Ankor et le Camboge au XVI^e siecle*, Preses Universitaires de France, 1958.
- 6) 景観を重視した東南アジアの生態空間については、京都大学の東南アジア研究センターを中心としたいくつかの区分案がある。図1のもとにしたのは、以下の7地帯区分である。①大陸山地, ②平原, ③デルタ, ④多雨林多島海, ⑤ジャワ火山弧, ⑥ウォーレシア, ⑦イリアンジャ。図1で海岸湿地としたのは、④のうちでマングローブや潮汐低地の部分である。京都大学東南アジア研究センター編『事典 東南アジア-風土・生態・環境』弘文堂, 1997, 11頁および314~315頁。
- 7) 坪内良博「〈圏〉概念社会単位論」(矢野暢編『東南アジア学の手法(講座東南アジア学1)』, 弘文堂, 1990), 130-146頁。
- 8) パイヨンやアンコールワット(12世紀前半の建築)の中央祠堂には神と王が合体した神像デヴァラージャが安置されている。その神はヒンドゥー教のシヴァ神であり、さらに大乘仏教や土着信仰と混淆して観音菩薩信仰もみられ、王権の神格化とむすびついた。
- 9) 応地利明「前近代アジア都市論構築のための試論」建築思潮3, 1995, 115~127頁。応地利明「王都の展開」, 京都大学東南アジア研究センター編『事典 東南アジア-風土・生態・環境』, 弘文堂, 1997, 394~395頁。
- 10) 石澤良昭『アンコール・ワット-大伽藍と文明の謎』, 講談社, 1996。
- 11) グロリエ著前掲5) 137~159頁。
- 12) グロリエ著前掲5) 160~165頁。
- 13) グロリエ著前掲5) 313~319頁。
- 14) グロリエ著前掲5) 314頁。なお、同様のトンレサップ沿岸の浮稲の記述は、1296年に元の使節通詞としてアンコールに滞在した周達観の『真臘風土記』(東洋文庫, 平凡社刊, 1984, 53頁)にも記載されている。周はまたアンコール周辺で年2~3回の集約的作物栽培の状況も報告している。
- 15) ドイツ語圏のシナ学者ウィットフォーゲル(K. A. Wittfogel)の水力社会論(hydraulic society)は、半乾燥地域に成立した黄河文明を定点に、乾燥地域のエジプト, メソポタミア文明を視野に入れながら、専制国家の成立には王権による強大な水支配が不可欠なことを論じた。しかし、カンボジアは熱帯サバンナ気候に属し、乾季の平原は荒涼とした景観になるが、年間降水量は1400ミリ前後で、雨季は自然降雨だけで稲作が可能である。アンコール王国の領域は、乾燥・半乾燥地域の絶対的(必須)灌漑ではなく、追加的灌漑の性格が強い。
- 16) ウィット・フォーゲル著、山田盛太郎訳『東洋的専制の理論』, 原書房, 1976(原著は1938)。同著、湯浅勉男訳『オリエンタル・ディスポティズム-専制官僚国家の生成と崩壊』, 新評論, 1991(原著は1957)。hydraulic societyはこれまでわが国では治水と利水を両方含めて「水力社会」と訳されてきた。アメリカでは人類学者のJ.H. Setwartらが1953年にアリゾナで学際的シンポジウムを開き、この概念を議論している。このときの訳はirrigation civilizationで、より灌漑を重視している事は明らかである。ここでは今回のシンポジウムでの末尾至行氏の指摘を踏まえ、また訳書にもあるとおり、「水力都市」とせず、「水利都市」としておいた。
- 17) 桜井由躬雄「大陸東南アジア農業のインド化-都市と農村のはざま」(石井米雄編『東南アジアの歴史(講座東南アジア学4)』, 弘文堂, 1991), 65~111頁。
- 18) Higham, C., *The Archaeology of Mainland Southeast Asia*, Cambridge, 1989. pp. 245-257.
- 19) Reid, A. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680: II Expansion and City*, Yale Univ. Pr. 1993.
- 20) 大木昌「東南アジア-一つの世界システム」

- (石井編著前掲17)), 148~156頁。
- 21) 生田滋は港市の類型として, ①農業を経済基盤とするもの, ②港市自身が小国家であるもの, ③港市国家の支配者が実際に貿易に従事するもの, に分類している。生田滋「東南アジアにおける貿易港の形態とその機能——17世紀初頭のバタムを中心として——」(『世界の歴史13南アジア世界の展開』, 筑摩書房, 1969), 258頁。
 - 22) トメ・ピレス, 生田滋ほか訳注『東方諸国記』, 岩波書店, 1966, 377~432頁。
 - 23) 鶴見良行『マラッカ物語』, 時事評論社, 1981, 120頁。
 - 24) 高谷好一『「世界単位」から世界を見る』, 京都大学出版会, 1996, 240~253頁
 - 25) トメ・ピレス著, 前掲22) 433~445頁。
 - 26) トメ・ピレス著, 前掲22) 456~472頁。
 - 27) 鈴木恒之「パレンバン王権の確立—大航海時代のスマトラ港市国家」(石井・辛島・和田編著, 前掲3)), 93頁。
 - 28) ① Aung Thaw, *Historical Sites in Burma*. The Ministry of Union Culture, Gov. of Burma, 1972, pp.16-20. ②伊藤利勝「10世紀前タトーン地域の文化変容—城市遺跡の構造と立地から」, 愛大史学(愛知大学文学部史学科) 3, 1994, 54-101頁。伊藤はタイ北部の勢力にとってタトンが重要な港湾戦略拠点であったことを強調する。
 - 29) ハンタワディー・ペグー朝の創始者ワレル(在位1287-96)はタトンの近くの行商人であったが, 1281年サルウィン川河口のマクタバン(図1参照)を押さえて都にし, ペグーも支配下に入れる。
 - 30) トメ・ピレス著, 前掲22) 205~206頁。
 - 31) Page, A.J., *Burma Gazetteer: Pegu District, Vol. A*. 1917, pp.22-37.
 - 32) Page 著, 前掲31) 31~32頁。多民族国家ミャンマーのモン族のアイデンティティの表出は, ビルマ族と融合して, モン州でのある程度の自治権を認められる以外は希薄であったが, 98年3月にバゴを訪問してみると, 王宮の復元が進んでおり, あらたなナショナリズムを模索しているかに見えた。
 - 33) U Shwe Zan, *The Golden Marauk-U: An Ancient Capital of Rakhine*, O Tha Tun(Yangon),1995.
 - 34) 千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』, 鹿島出版会, 32~33頁。前掲28)④16~33頁。
 - 35) Aung-Thwin, M., *Pagan: The Origins of Modern Burma*, Univ. of Hawaii Pr., 1985. pp. 145-160.
 - 36) 野間晴雄「ミャンマーの歴史地理像—人口希少な複合社会のジレンマ」, 地理42-3, 1997, 38~40頁。
 - 37) Aung-Thwin, M., *Irrigation in the Heartland of Burma: Foundations of the Pre-colonial Burmese State*, Center for Southeast Asian Studies, Monograph Series on Southeast Asia, Northern Illinois University. 1990.
 - 38) イラワジ川中流域(上ビルマ)には都市のみならず集落にも方形原理がみられる。これらはビルマ語で囲郭を持った myo といわれるものに相当する。しかし王が住む都 myo-daw は峻別される存在である。
 - 39) 新谷忠彦編『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・民族・言語』, 慶友社, 1998。イギリス植民地時代からシャン州は, 「サルウィン川のこちら側のシャン」, 「サルウィン川の向こうのシャン」と分けられているが, ここで問題としている領域は前者である。
 - 40) ①野間晴雄「ミャンマーの囲郭都市」『ユーラシアにおける都市囲郭の成立と系譜に関する比較地誌学的研究 平成6~9年文部省科学研究費補助金成果報告書(代表:戸祭由美夫)』, 奈良女子大学, 1998, 109~112頁。この報文は前掲36論文)の一部に都市プランの図面や上ビルマの事例を追加したものである。② O'Conner, V.C.S., *Mandaley and Other Cities of the Past in Burma*, Hutchinson & Co. 1907, 436p.
 - 41) 大野徹「ビルマの王都マンダレー」, 東南アジア研究21-1, 1983, 92~93頁。
 - 42) 米倉二郎「インドの都市と集落」米倉二郎編著『インド集落の変貌—ガンガ中流域の都市と村落』, 古今書院, 1973, 41~53頁。
 - 43) 大野論文, 前掲41) 91~92頁。
 - 44) 千原著前掲34) 262~263頁。
 - 45) フーンズ, フリート, コイエット著, 生田滋訳注『オランダ東インド会社と東南アジア』, 岩波書店, 1988, 95~214頁。
 - 46) フリート著, 前掲45) 196~198頁。

- 47) Reid 著, 前掲19) 25~30頁。
- 48) フリート著, 前掲45) 199頁。
- 49) 石井米雄「タイの中世国家像」(池浦雪浦編『変わる東南アジア史像』, 山川出版社, 1994), 137~141頁。
- 50) Snait C., "Mandala', 'Segmentary State' and Politics of Centralization in Medieval Ayudhaya". *The Journal of the Siam Society*, Vol. 78 Part1, pp. 89-100.
- 51) 石井論文, 前掲49) 140~141頁。
- 52) 白石昌也「ベトナムの「まち」-特に「くに」との関連を中心にして」, 東南アジア研究 21-1, 1983, 102~105頁。
- 53) 野間晴雄「都市・農村関係モデルとしてのハノイ-都市化とドイモイ以降の農村変化」成田孝三編『大都市圏研究-多様なアプローチ(下)』, 大明堂, 1999 (近刊)。
- 54) 野間論文, 前掲53)。
- 55) Phan Hyu Le, *Hoi An(Faifo): Past and Present*, in National Committee for the International Symposium on the Ancient Town of Hoi An, *Ancient Town of Hoi An*, Foreign Language Pub. House, 1991. pp.17-20.
- 56) 石井米雄・桜井由躬雄『東南アジア世界の形成(ビジュアル版世界の歴史12)』, 講談社, 6~8頁。
- 57) リード著, 前掲4) 169頁。

Royal Prerogative and its Hinterland
—Discussion on the Extension of Hydraulic City and Port Polity
in Pre-modern Southeast Asia—

Haruo NOMA

This paper aims to study royal capitals and port polities in pre-modern Southeast Asia from the viewpoints of construction idea or cosmology, urban forms and their functions, and their economic or physical hinterlands. In addition to these, the author reexamines two exciting hypotheses that raised by B. Groslier and A. Reid. These were generally said to be hydraulic cities and port polities in the age of commerce respectively.

The results of this study are summarized in the following:

- 1) Implication of Groslier's hydraulic city is urban-rural economic interaction only in the Khmer capitals of Ankor and its surrounding area that provide food for residents. It is not applicable to whole command area of Ankor.
- 2) Concept of port polity raised by Reid is highly concentrated on forward area of Malaysian sea world, but it lacks the consideration on its hinterland and the complex types of port polity that were seen in mainland Southeast Asia.
- 3) The features of port polities are characterized by their highly economic oriented urban forms under a powerful mercenary system and international composition of residents that lack their religious cosmology. Maracca is the most typical port polity in pre-modern times that has no direct hinterland, but we must consider the other types of port polities that are "hinterland type" and "complex type".
- 4) In Burma, sorts of port polities located along the Indian Sea such as Thaton and Pegu, and large imperial state such as Pagan in Upper Burma are formed separately. In the course of national integration among two areas, Burma had developed agriculture-oriented inland state gradually. Under such situation, even the late 19th century, Indian cosmology of the King's capitals had been kept or sometimes intensified.
- 5) In Thailand, many small states of "Muang" type that have small hinterlands were formed in mountainous basins in the North. In contrast, Ayutaya has constructed a very large port polity having wide hinterland in the Chao Phraya delta, its upper streams and its surrounding area.
- 6) Vietnam formed territorial states in the Red River delta in the early stage, but the commercial development was left behind because of high population density, strong Chinese influences and its geo-political or economic location.